勘違い行進曲

野山日夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勘違い行進曲

【Ｎコード】
Ｎ６６２９Ｙ

【作者名】
野山日夏

【あらすじ】
ゴールデンウイークの中休みとなった月曜日、酒の失敗に苦悩する青年の話を始めとした、様々な人の勘違いの話。※オムニバス形式に変更することにしたため、タイトル改題いたしました。

1

からりとした天候はまさに五月晴れ。雲一つなく快適な清々しい朝に、子供達だけでなく職員室に集まる教員達も明日から始まる大型連休にどことなく浮かれるのがこの時期には当然見られる様子だった。

それは、普段どことなく疲れた顔を見せる教師達が週初めにも拘わらず明るい顔を見せることからも明らかだったし、中には真面目に職務に取り組む余り大型連休に向けて生徒に宿題を出そうと液晶画面の前に張り付く者もおり周囲の教師の苦笑を誘ったものだ。

そんな時期の職員室の一角に、しかし今日は浮ついた空気とは無縁の重苦しい空気を纏って頭を抱えて唸る男の姿がある。普段どちらかといえば早く来る方では　ない男だが、今日はこの中の誰よりも早く来ていた。そして誰とも話すことなくこの状態では、当然他の教師の興味を引いた。

余りの落ち込み具合　は、下手に声をかけるのすら躊躇われるほどだ。結局同僚達はその異様な光景に何をやらかしたのと、土日の間に彼の経験しただろうことを心配と好奇心を半々　に織り交ぜて想像しつつ遠巻きにするしか出来ない。男に気遣い、今日は連休の予定を話すのを皆控えている。

「山田先生、どうしたんですか？」

とうとう耐え兼ねたのか、男の同期が声をかけた。彼等は新卒同士それなりに有効関係が気づけている二人で、知り合ってから一月とは思えないほどに仲が良く、時々からかわれるほどの仲だ。

「あの佐々木先生が……」

「あんだけ美人な佐々木先生に問い詰められたら、俺なら何でも言っちまいそうですよ」

「やだ保坂先生、それ奥さんが聞いたら怒りますって」

勇気あるその行動に周囲の教師はざわめき、思い思いのことを口

にする。普段ならばそれなりに話をする相手であるから何かしらの反応はあると踏んでいた周囲の予想に反し、男は机から視線を離さない。完全に自分の世界の住人だ。これはどうやら重症らしい。

まぁ、まだ若いし何かしらの失敗は当然だ。そのうち立ち直るだろう。

そう結論づけ、周囲はそろそろ始まる始業時間に向けて準備をし始めた。

2

そんな周囲のやり取りにすら、男、山田卓哉は全く気がついていなかった。それよりも卓哉にはもっと優先的に懸案すべき事案があったのだ。

それは二日前に遡る。金曜の夜就職して以来初めて大学時代の友人である秀司と飲みに行った。大学を出てからの一ヶ月間仕事に追われろくに会えていなかった秀司との再会に、つい酒が進みすぎたのは否めない。

結果記憶を飛ばすほど酒を飲み、気がつけば土曜の朝、卓哉はチープな部屋に置かれたベッドの上で見知らぬ異性と同衾している、という事態に置かれていた。

それだけならばまだ卓哉もやってしまった、と悔やむだけで済んだ。大学生の頃だって酒を飲んでは記憶を飛ばして生きずりの相手と致してしまったことはあったし、どころかそれは女性経験を数える上でちょっとしたステータスのようにすら思えていた。

だが今回はそれが問題だった。

（どう見てもあれまだ高校生、いや下手すりゃ中学生じゃねぇかッッ！）

添い寝ならばまだ褒められはしないまでも辛うじて許されるだろうが、同衾までしてしまっていてはどう考えても教師失格の事態だ。

教師、そう教師だ。卓哉は世間から聖職者と呼ばれる教師になったというのに、就任して僅か一月で既に教師生命の危機に見舞われた訳だった。

恐慌状態に陥り、辛うじて金だけ置いて部屋を飛び出してからのこの二日間、卓哉はずっとこの調子だった。

そもそも友人と飲んでいたはずがどうしてラブホテルなどに子供と入ったのかという疑問から始まり、酔っ払っていた己にどうして子供に手を出したのかを問い　詰める。かと思えば避妊はしただ

ろうか、もししていなければ高校生に手を出したのならば親に挨拶に行くべきだろうがその前に連絡先すらも分からず、そもそ　もこれを親に訴えられたら職も失ってしまうなどと思考のドツボに嵌まっていく。

ぐるぐる落ち着かない思考に、卓哉は今朝も家に大人しくしているということは出来ず朝一でこの学校に来てしまっていた。

「どうすりゃいいんだ……」

言った辺りでチャイムが鳴り卓哉ははっ、と時計を見る。一限の開始の鐘の音に、卓哉は慌てて立ち上がると己の担当する学級へと急いだ。

3

卓哉は何とか今日予定されていた授業を全て終えていた。だが自分でも分かるほどに卓哉の授業は上の空だ。

特に今終わったばかりの二年生の授業は酷かった。今日から新単元に入るということで教科書に載っている小説の音読を段落毎に区切って生徒にさせていたが、ぼんやりしているために生徒が読み終わっても気がつかず、生徒から次を催促され我に返ることも数度あったほど。

幸い明日からの連休中に予定はないので、その間に何とか折り合いをつけ、名も知らぬ情を交わした相手との一件に決着をつけなければならない。

そう決意をし教室を立ち去ろうとした卓哉に、甲高い声が掛けられた。

「やーまだっ」

その声に卓哉は苦々しい顔をする。新卒の教師はどうやら二年以上の生徒達の中では友人に準じた扱いか何かのようで、常に嘗められているのだが、その中でも特にそういった言動ばかりを取る少女ら三人に声を掛けられていたのだ。

「山田先生と呼びなさい」

こういった態度を取らせることと友好的な関係は別物であるし、特に新卒は嘗められてからでは遅い。そう指導されているため卓哉はぴしゃりとそう言うが、セーラー服に身を包んだ少女達はそんな大人の事情など意にも介さない。

「山田は頭固いなぁ」

呑気にそんな声を上げてけたけたと笑うばかりだ。卓哉は苛立ちを覚えたが、相手は子供だと言い聞かせて何とか己を押さえ込んだ。

「それよりさ、山田今日ぼうっとしてるけどもしかして色ボケ？」

「あれでしょ？　熱い夜ってヤツを思い出してるんでしょぉ」

教室で教師に振るのにこれほど相応しくない話題もあるまい、と卓哉の顔に苦々しい表情が浮かぶが、少女達はますます楽しげな様子を見せるばかりだ。

挙げ句多少声を潜めてではあるが、とんでもないことを言い出した。もしこの現場を同僚に見つかりでもしたら、懇々切々と教師として己の行動に対する責任を諭されるに違いない。

「私達知ってるんだからね！」

「金曜の夜、先生ったらミナちゃんと一緒にいたでしょ？」

「ミナちゃん？」

聞き覚えのない名前に誰何を返してから、卓哉は該当する人物が一人しかいないことに気が付いた。酔った弾みに卓哉が寝てしまった女だ。

だがそれを少女達は卓哉が惚けてみせたのだと思ったらしい。声に少しばかり己は知っているのだという優越感を織り交ぜて、少女は言う。

「ミナちゃんはミナちゃんよ。駅前の塾のミナちゃん。ごまかしたってムダよ。アタシ達先生達が密着して歩いてるの見ちゃったもん」

「あのミナちゃんが！　って思ったよね！」

「しかも冴えない山田と。ねぇ、あの後ホテル言ったぁ？」

きゃはは、と残酷に卓哉をけなす少女達の声は、しかしもう卓哉の耳には入っていなかった。

どうやら卓哉が体を重ねた相手は彼女らの知り合いらしい。どこの誰だか分かったのはよかったが、この姦しい三人娘に見られていたのなら、あっという間にこのことは学校中に広まるに違いない。もう教師生命は断たれたも同然だった。

「あれ山田？」

「……高校生があんま遅くまで出歩くんじゃない。あと山田先生、だ」

「ええーっ」

「山田頭固い！」

何とか取り繕ってそう言い教室を離れれば、背後から不満たらたらの声が卓哉を追ってきたが、もう卓哉にはそれに相対するだけの気力も残されてはいなかった。

4

駅前の塾は今流行りの個別指導の塾らしかった。小学生から高校生まで幅広い年齢層の生徒がばらばらと出入りしているそこを、卓哉は少し離れたところから見守っている。

一度家に帰ってから卓哉はネオン煌めく駅前へとやって来て、ミナちゃんなる人物がいつ出て来るか、と先程からそこに立っていた。個別指導なのならもしかしたら今日はいないかもしれなかったが、いるかもしれないと思うといても立ってもいられなかったのだ。

職はすぐになくしてしまうだろうが、とりあえず社会人として責任は取らなければ。そう戦地に赴く軍人か何かのような悲壮な面持ちで塾の入口を睨む卓哉に、　奇異の視線を向ける者もいないでもなかったが、忙しなく歩き去る大抵の都会人は有り難いことに卓哉の存在を大して気に留めていないようだった。

ここに立ってから一時間余り。考えれば考えるほど緊張や何やら、筆舌に尽くし難い思いに襲われて、卓哉は無意識に懐を探った。緊張から震える指先で何とかタバコを一本取り出して慣れた仕種で火をつけたところで、親しみを込めて卓哉の名を呼ぶ声がした。

「あれ？　卓哉君じゃない」

その声に卓哉が声の主を見れば、ぎょっとする。片手を小さく振って、すぐ傍にあの女性がいた。卓哉を見上げて来る顔に浮かんでいるのは極々穏やかな表情で、まさに知人を見かけたから声を掛けただけらしい。

ミナは白のブラウスに黒のジャケットとスカートという出で立ちで、見上げて来る顔立ちは薄く化粧をしているのも相俟って記憶より多少大人びて見えた。

「メアド教えたのに。直接会いに来てくれたんだ？」

どうやら携帯にミナの連絡先が登録されていたらしいと知り、卓哉は苦笑した。二日間全くそのことに思い当たりもしなかった自分

がどれだけ混乱していたかを思い知った自嘲の笑みだ。
「ってか先に帰っちゃったから脈がないのかと思っ、卓哉君？」
ミナを正面から見た途端、卓哉は口の中が渇いたのを感じた。相当自分は緊張しているようだと思いながらミナの左手を取るとミナは卓哉の名を呼ぶ。
「その……だな」
「うん？」
「――俺は金曜すごい酔ってて、酔った勢いという奴で君に手を出してしまい、だからといって覚えてないのは理由にならないと思うし……その、まだ子供の君にとんでもないことをしてしまった責任はきちんと取ろうと思う」
話を聞いていたミナの表情が段々訝しげなそれに変わっていくのを見て、卓哉はミナが何か言う前にと早口でまくし立てた。
「俺は多分仕事を懲戒免職とかにされると思うが、最悪バイトだろうがやって何とか君を養って行けるだけの努力をしようと思う」
そして卓哉は勢いよく頭を下げた。
「だから結婚を前提にお付き合いをさせてもらえないだろうか」
しん、と静まり返る空気に、卓哉は恐々とした。何も言い出さないミナが心中でどう思っているのか分からないことがこれほど恐ろしい。
ややあってから、ミナがぽつりと感情のない声で言った。
「そっか、忘れちゃったんだ？　そっかそっか」
その声に卓哉はそら恐ろしさを覚えたが、その前にミナがにこりと笑った。満面の笑みには先程までの怒りなどかけらも見えず、それがまた妙に恐ろしい。
「いいよ、結婚しても。酒の失敗しないでくれるのなら。学生結婚とかって憧れるし」
酒の失敗の辺りが妙に刺々しいのは卓哉の気のせいではないだろう。その辺りは卓哉も頭を下げて反省の意を示すしかない。
そこでミナが一息区切った。

「ただ、」
何か言いさしたミナの言葉を、しかし遮るようにいくつもの声がミナに掛けられる。近所の中学の制服姿がいくつもミナの背を抜き様声を掛けていく。
「あれ、ミナちゃんじゃん！」
「ミナちゃんさよならー」
「あれ、ミナちゃん彼氏とデート？」
「あんた達ねぇ、先生ってつけなさい。あと人の私生活詮索する暇があったら勉強しろー」
そんな彼等の背中にミナが声を投げ掛ける。返された返事だけは優等生だったが、その声に全くミナの言い付けを守る気がないことは明白だった。
「はーいミナちゃん先生」
一連のやり取りをつい呆然と見つめていた卓哉に、ミナは振り返ると悪戯っぽく笑う。
「私、卓哉君が思っているより年上なんだけどいいかな？」

5

ミナが語るところに因れば、ミナは現在大学の四年だという。とはいえ年は卓哉と同じだそうだ。それが信じられず不躾な視線でじろじろとミナを見遣ると、ミナは気分を害したらしかった。

「確かに私は童顔ではあるけど、だからって流石に五歳もサバ読めないって」

ぷぅと頬を膨らまして言うミナはやっぱり化粧の力をもってしてもまだ高校生にしか見えず同い年とは認めがたかったが、ほら、と免許証まで見せられては、卓哉は渋々ミナの年齢を受け入れた。

場所は移って駅前のデパートのレストラン街の一角。感じのいいイタリアンチェーンに卓哉を招いたミナは、クリームたっぷりのパスタを口元へ運ぶ。それを見て卓哉も己のパスタ皿の中に転がるアサリにフォークを突き立てた。口に運んだ瞬間広がる汁に、卓哉は舌鼓を打つ。

因みに、ワインを薦めたミナだったが、酒の失敗をしたばかりの卓哉なので遠慮した。

そうしてミナが面白そうに金曜の真相を語るところによると、卓哉と秀司が飲んでいた居酒屋で偶然にもミナも友人と飲んでいたらしい。友人と別れ際になって高校時代の同級生である秀司の姿を見つけ、声を掛けたのだという。

「私も相当酔ってたから遠慮とかなかったっていうか。ああ、卓哉君はその頃にはべろべろだったから覚えてないんだろうね」

ミナの指摘の通り、さっぱり卓哉にはその記憶がなかった。完全に記憶が飛んでいる。

「んで私はそこに紛れてまた飲み始めて、そしたら卓哉君とすごい意気投合したんだよね。まぁ酔っ払い特有のノリのよさなのかもしれないけど」

記憶が飛ぶので卓哉は自分では今一つ分からない。だがかなりの

絡み酒らしくお前と飲むのは面倒臭いから嫌だと言う友人もいるので、そんな酔い方をする自分と意気投合というのもすごいものだと思った。
「秀司が終電だから帰るって言ったときも盛り上がってたから私達は残って、まぁ当然終電逃して。んで朝まで時間潰そうってカラオケか何かに行くはずだったんだけど、」
大学時代よくやった朝まで遊ぶ典型的なパターンを選択したらしい己に頭を抱えた。勤務先が近いから駅前には出来る限り寄らないようにしていたというのに、身についた習慣は消えないようだ。
「なんかいつの間にか愚痴の言い合いになって、そんで仕事が忙しくて異性と知り合う機会がないって卓哉君が憤慨してさ。後は生徒に対する愚痴とか」
確かに教職などしていては機会がないのは常日頃から思っているが、それについて愚痴を漏らしたようだ。
「私も塾講なんてやってるから気持ち分かるし盛り上がっちゃって、こんなに気が合うんだからもう結婚するしかない、みたいなノリ？
それでアドレス交換してカラオケじゃなくラブホ行って。酔っ払いって思考が短絡的だよね、うん」
そこから先は卓哉も知っている。高校生と事に及んだと思い込み、金だけ置いてホテルから逃げ出したのだ。
あっけらかんと放たれたが、卓哉は頭を抱えた。とんでもない論理の飛躍が間にあるが、完全に同意の上の流れだった。そして、自身の酒癖の悪さとやらを卓哉は初めて自覚することが出来た。そんなノリに絡まれるのは酔っていなければとんでもなく煩わしいに違いない。
聞いているうちにいたたまれなくなり卓哉は頭を抱えて卓に突っ伏していた。
「私も朝やっちゃったなぁ、って思ったけど、卓哉君いないし遊ばれたかぁ、みたいな感じだったから気にしてないし、元気出してよ。――んで、どうする？」

6

自己嫌悪で消えてなくなりたい卓哉の心境とは対照的な明るい慰めが卓哉の上に投げ掛けられ、頭を抱えていた卓哉は顔をあげる。ミナは水を手に一息つくと、　打って変わって真剣な眼差しを見せていた。いつの間にか、ミナの前に置かれていたパスタはミナの胃に収まっていた。一方、話を聞くのに集中していた卓哉の　方はほとんど中身が減ってやいなかった。

「私は高校生じゃないし、避妊もちゃんとしてたから卓哉君が取るべき責任って奴はないけど、私と結婚してくれる？」

言われて卓哉は言葉に詰まった。ミナが大学生と知って以来考えないようにしていたことを口に出されたからだ。口がからからに渇いた気がする。水の入ったグラスに手を伸ばして中の澄んだ液体を飲み込むと少し心中に落ち着きが戻ってきた。

結婚云々は自分でも先ほど口にしたことではあるのだが、必要性に駆られていない今、卓哉は諾と返すことに抵抗があった。

「いや、俺達お互いのこと知らないじゃないか」

何とかそう口に出すと、ミナは首をふるふると横に振った。

「私は知ってるよ？　自己紹介ちゃんとしたもん。山田卓哉、二十二歳。職業は国語教師。仕事は好きだけど、慣れない環境で四苦八苦してる。趣味は読書。結構無　節操に本に手をつけるけど、文学賞取った奴は絶対読む。あと専門書や実学系には興味がない。今付き合ってる彼女はいなくて、交際相手に求めるのは癒し」

指折り数えながらつらつらと淀みなくあげられたプロフィールに、卓哉は口を閉ざざるを得なかった。酔っていたから、とミナは言うが、酔っていてもミナは誠実に卓哉に向き合っていたのだろう。だからこそ、口で一通り述べただけだろう細かいところまできちんと覚えている。

「私は酔ってたけど、この人と結婚してもいいなって思ったのは本

心。ま、いきなり結婚って言うのは確かにちょっと、って思うけど。単に付き合うくらいはいいじゃない？　私が女に思えないからってフるのはありだけど、私を知らないからってフるのは許せないな」

ミナは酔っ払っていたとはいえきちんと卓哉と交わした約束を忘れないで覚えている。それに対して全てを酒が抜けると共に忘却してしまった挙げ句、そんな真　摯に対応しようとしてくれた相手をホテルに一人残すような真似をする自分の不誠実さに己の矮小性を見出し、卓哉はそれを恥じた。

酔っていようが結婚の申し出をしたらしいし、彼女の年齢ならば何も犯罪ではない。結婚でもなく交際を断る理由が果たして明示できるか。

「ね、まずは恋人から始めてみない？　まずは私を知ってよ、卓哉君」

――否だ。

卓哉はこれ以上ミナの言葉を拒むほどの人で無しではないつもりだったし、ちょうど明日からは黄金週間で、その間の予定もない。お互いを知る時間は十分にありそうだ。

卓哉に残された返答は諾でもう決まったも同然だった。

まずは伸びてしまって美味しくないかもしれないパスタを食しながら、ミナの自己紹介を聞こう。

そんなことを考えながら、卓哉は口を開いた。

6（後書き）

卓哉とミナの話はここで一旦終わりです。
次はストーカー気質の人の話、のはず？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6629y/

勘違い行進曲

2011年12月2日00時53分発行